シリーズ連載　地方公務員 file

風を起こす <第20回>

地域のために行動してこそ自治体職員

元釧路市職員・NPO法人「わたぼうしの家」事務局長

工藤 洋文さん

フランスの哲学者・デカルトは〝To be is to do（生きることは、行動することである）〟と言ったそうだが、行動することは意外と難しい。損得を考えると、下手に動けなくなることもままある。しかし、どれだけ知識や技術があっても、行動しなければ見えてこないことは少なくない。

地域の居場所が、高齢者の生きがいづくりと子育て支援に

住宅街の一角で黄色い幟（のぼり）が目を引く「地域食堂」。あいにくの雨にもかかわらず、午前11時の開店と同時に続々と客が訪れる。〝あら～元気やった？〟〝今日は最高の天気やね～〟30以上ある座席はすぐに賑やかな声でいっぱいになった。

地域食堂は毎週月曜日、13時までの2時間だけ開店する。今日のメニューは季節の栗ごはんと豚汁、もやしのお浸し。ぜんざいのデザートまで付いてたったの300円。

料理や配膳をするのは、専任シェフ1人を除いて全員ボランティア。60歳代から80歳代の女性17人が4班に分かれ、月1回のローテーションで担当する。

〝この子は私が抱っこしてるから、ゆっくり食べなさい〟とボランティアの女性が若い母親に声を掛ける。隣室ではママ友がおしゃべりに花を咲かせ、子どもたちが元気に駆け回る。

「0歳から90歳代までと年齢層は幅広く、来客数は多いときで1日70人を超えることもあります。〝食〟を核にした地域交流の場

［くどう ひろふみ］
1953年、北海道釧路市生まれ。1974年、釧路市役所に土木技師として入庁し、2012年3月末退職。プライベートでは、NPO法人「わたぼうしの家」事務局長として、認知症のグループホーム、デイ・サービス事業、高齢者の共同住宅、コミレス「地域食堂」などの運営に携わる。北海道自治体学会、釧路湿原塾副会長も務める。趣味はカヌーと登山、おやじバンドリーダー、スキー。共著に『参加と協働のデザイン』(2009年、学芸出版社)、『コミュニティ・レストラン』(2007年、日本評論社）がある。

が、高齢者の生きがいづくり、子育て支援などに一役買っていますよ」

そう胸を張るのは「地域食堂」の仕掛け人・工藤洋文さん。２００４年４月にオープンした「地域食堂」は、地域交流の成功例として、多くのメディアで紹介されてきた。そのノウハウを伝授すべく、工藤さんは北海道内はもとより全国各地を飛び回る。

ママたちもおしゃべりしてストレス解消

自分たちの手で地域は変えられる

〝本当に住民は喜んでいるのだろうか〟――工藤さんが自治体職員として自分の仕事に疑問を持ったのは30代も半ばにさしかかった頃だった。東京の民間企業での経験を携え、土木技師として入庁して約10年。登山で知り合った好子さんと結婚し、子どもにも恵まれ、何不自由ない生活を送っていた。

転機のきっかけは、自宅のある新興住宅地での植樹活動。〝数十年で枯れてしまう街ではなく、１００年後も住民が生き生きと暮らす街であってほしい〟と、児童館の子どもたちと一緒にどんぐりを拾い、苗を育て、苗木を植樹帯に植えた。

“人見知りしなくて良い子だね～”

「目を輝かせ木を植える子どもたちに手応えを感じながら、〝誰かにやってもらうのを待つのではなく、自分たちの手で地域は変えられる〟と実感したのです」

市役所では有志による「まちづくり研究会」に参加し、他の自治体職員と交流した。そこで出会った恵庭市職員（前恵庭市長）の言葉に工藤さんはハッとさせられた――〝自治体職員は、どっちを向いて仕事をするんだ〟

「胸にストンと落ちましたね。彼の話を聞くうちに、心の中でわだかまっていたものが、理論的に整理されていきました。彼には、住民のために動いた自治体の事例もたくさん教えてもらった」

その一つが「自分たちで生命を守った村」として語り継がれる岩手県沢内村。日本のチベットとも称される村は、冬になると雪で道が閉ざされ、病院に行くことさえできない。少ない予算の中からブルドーザーを確保して、雪道を拓き、閉ざされた生活を一変させた。赤ちゃんの命を救うことを最優先課題とし、１９６１年、全国で初めて「乳児医療費無料化制度」を導入した。〝命を救いたい〟という一心であらゆる策を講じ、乳児死亡率は６％から０％になった。

「沢内村の本を読んで泣きましたね。本当に泣いた。自治体職員として、こんな生き方があるんだ。俺たちが目指す姿は、これなんだなと」

さらに火をつけたのは、自分たちで企画した講演会で聞いた大学教授の言葉だった。――〝役所を辞めるとき、足跡の無い人間が山ほどいる。足跡が無いということは、何もしなかったということ。自治体職員は実践してなんぼの世界〟

「それを聞いて、ああ、そうか。退職するとき〝大過なく役所人生を過ごすことができました〟と言うことは、何もしなかったということなんだなと。足跡を残すために、俺は大きな過ちを起こせばいいんだ。よし、面白いことをやっていこうと思ったのです」

９時からも５時からも行動する！

〝９時からもやるし、５時からもやる！〟やる気エンジンが全開になった工藤さんは、まず、９時からの顔で成果を挙げた。

北海道で「脱スパイクタイヤ推進条例」が制定された１９９２年のこと。路面凍結を防ぐためロードヒーティングの導入を検討するものの、売り込みに来た大手メーカーのシステムはどれも常時電気を流すため、ランニングコストの高さから財政がもたないことが予測できた。釧路は北海道内でも比較的雪が少ない地域。〝このシステムは釧路には合わない〟そう判断した工藤さんは、アメ

お客様が帰られた後にボランティアさんたちが遅めのランチ

ダスとの組み合わせを閃いた。

「アメダスは、気象観測を自動的に行い、地域ごとに細かく監視してくれるシステム。これを活用することで、ロードヒーティングを効率的に制御運転でき、ランニングコストが大幅に抑えられると考えたのです」

役所がイニシアチブを発揮し、メーカーと共同しながら、釧路独自のシステムができあがった。〝役所はとかく目先のことだけにとらわれがち。だが、長い目で見て本当に使えるものかどうか〟――その視点を失うことなく仕事に取り組んだ。

役所での知識と経験が地域のために

土木技師として9時からの仕事で成果を出す一方、5時からの顔では、認知症の家族を抱えるグループ「たんぽぽの会」から依頼を受けて、月1回、ボランティアで送迎車の運転を引き受けた。福祉分野については門外漢の工藤さん。雑談の中から、介護が原因で崩壊する家庭があること、認知症患者を預かってくれるグループホームが無くて困っていることを知った。

たんぽぽの会では、介護保険制度の施行にあたり、独自のアンケート調査を実施することになった。〝工藤さん、協力してくれるかい？〟声が掛かって、ふたつ返事で引き受けた。エクセルを使ったデータの集計や分析、事務処理など、役所では出来て当たり前のことも、仕事で関わったことがない人にはハードルが高い。工藤さんの知識や技術は大いに重宝された。アンケート調査の結果は、回答者の生の声とともに報告書としてまとめられた。

2000年から始まる介護保険の問題点を指摘した報告書は、意図せずして厚生労働省にも届き、〝NPO法人でもグループホームに補助金を出す〟という情報を得た。〝認知症患者のグループホームをつくりたい〟という思いを抱いていた「たんぽぽの会」のメンバーとしてみれば、願ったり叶ったり。だが、NPO法人とは一体どういうものかわからない。再び、工藤さんに声が掛かった〝工藤さん、NPO法人ってわかる？〟――〝わかるよ〟笑顔で返答した。というのも、工藤さんは、4年ほど前に、NPO法人に関する研究会に参加していた。

「NPO法人のことを知って、これはまちを変える武器になり得るなと。そのことを、頭の片隅に置いていましたから」

〝NPO法人ならでは〟にこだわって

介護保険制度の施行を目前に控え、グループホームの計画と、NPO法人の設立が同時並行で動き出した。

「建物5割、介護5割」とも言われる認知症の介護。建物の設計が大きなカギを握る。認知症患者にとって、どんなグループホームがいいのか。広く意見を集めようと、市民を巻き込んでワークショップを開催した。それも、アリバイ的ではなく、本物のワークショップにこだわった。コーディネーター役として、札幌から、介護に詳しい建築学科の助手に頼み込んで来てもらった。すべてが手探り状態の中で、工藤さんは枠組みをつくる役割を担った。帰宅後、遅くまでパソコンに向かう日々が続いた。

2000年6月、NPO法人「わたぼうしの会」が設立され、翌年10月に補助申請をし、2003年4月、認知症患者のためのグループホーム「さんぽみち」がオープンした。

「NPO法人を立ち上げても、それをどう生かしていくかが難しいのです。民間のグループホームとどう差別化するか。その違いは〝介護の質〟。徹底して介護の質を求めなければ、NPO法人としての存在意義が無い。そのために、臨時やパートの職員は極力少なくし、正職員を多くしました。プロ意識の高い仕事ぶりを参考にしたいと、他のグループホームからたくさん研修に来られています」

〝NPO法人ならでは〟の高齢者対策を模索する中で、事業展開は次々に広がっていった。在宅の認知症のための通所介護、高齢者が仲間と助け合いながら共同生活を送ることができる集合住宅の運営、等々。その一つが「地域食堂」だ。

本日のメニュー。このボリュームでたった300円

タネも仕掛けもある「地域食堂」

「地域の課題を探るため、近隣に住む一人暮らしの高齢者宅を訪問して回ったとき、人と話すことに飢えている高齢者の姿が見えてきました」

そこで、一人暮らしの高齢者を中心に毎月1回「地域食事会」を開催することにした。米1合と300円を持参してもらって、皆で料理をつくり、一緒に食べる。多いときは20人以上が集まり、賑やかに食卓を囲んだ。2年ほど経った頃、曜日を分けて同じ建物で活動していた任意団体が、月曜日の事業を中止することになった。〝だったらコミレスをやろう〟工藤さんは温めていた企画を実行に移した。「コミレス」はコミュニティ・レストランの略で、前金沢大学大学院教授の世古一穂さんが提唱、女性の自立を目的としていた。

〝でも、そのままの形じゃ釧路に合わない〟。工藤さんは、既に定着していた地域食事会を柱に「集う・食べる・語る」をテーマとして、地域社会の再構築を目指すことにした。〝うちは釧路らしいコミュニティ・レストランをつくろう〟

その目論見どおり、地域食堂はさまざまな効果を生み出した。当初は高齢者を対象としていたが、次第に親子連れも訪れるようになった。孤独に陥りがちな子育てママの支援につながる一方、高齢者には生活の張りをもたらした。

「あるボランティアさんが入院したとき、〝食堂の手伝いがあるから病院で寝ていられない〟と言ったそうです。月1回のボランティアでも、社会の一員として役立っている実感があるんですよ。それに…」

と工藤さんは、声をひそめて続けた。

「ここに来るときは、皆さん普段よりオシャレしているんです」

オシャレして行く場がある、それだけでも生活に張りが出るはず。工藤さんの言葉を借りれば「心の介護予防」になる。

地域のつながりが希薄化する中、「コミレス」の可能性が注目を集め、全国各地に広がりを見せている。だが、単に安価な食堂を開くだけでは上手くいかない。「地域食堂」にはタネも仕掛けもあるのだ。

「入り口で案内をしていた女性がいたでしょう。彼女はコーディネーター役です」

コーディネーター役は、来客の会話が弾むよう座席を配慮したり、話題を提供して話しやすい雰囲気を演出したりする。その他、声を掛けるときは名前で呼ぶなど、居心地の良い環境をつくる小さな工夫がいくつも隠されている。

「北海道はコミレス先進地域で、既に40以上あります。同じコミレスでも、食育や安心・安全などテーマが違う。特徴的なコミレスを調査して、運営のノウハウをブックレットにまとめようと、いま仲間たちと動いているところです」

自らの行動が、道をつくる

工藤さんは昨年3月、59歳で退職した。1年早く役所を後にした理由を尋ねると〝元気なうちに山に登りたかったから〟と笑った。共に早期退職した好子さんと日本百名山制覇を目指し、昨夏は九州、四国、中国地方と巡った。

民間経験者だからなのか、在職中は最後まで役所の体質が合わなかった。行動しない自治体職員に何度もはがゆい思いをした。役所の中だけでは埒が明かないと悟り、役所の外「まち」に出た。そこで道が開けた。

減点主義では、行動しようがしまいが、評価は変わらない。損得を考えれば、むしろ行動を起こすことによるリスクのほうが大きい。だったら、行動しないほうが得なのか？

「それでも、行動したほうが断然いいですよ。自分の殻を破ることでダイナミックな人生が送れるし、何より自分が楽しめる」

地域を支える裏方として、やりたいこと、やるべきことは尽きない。9時からと5時からの足跡の先に、「これから」の道がつながっている。

（執筆／協会職員　篠田良子）